

# 日本国際理解教育学会会報

JAPAN ASSOCIATION FOR INTERNATIONAL EDUCATION NEWSLETTER

Vol. 37 2010 (平成22年度) No. 1 平成22年10月31日 編集発行：日本国際理解教育学会事務局  
〒187-0021 東京都小平市上水南町3-2-1 文化女子大学小平キャンパス栗山研究室内 TEL：042-327-8873 FAX：042-327-8874  
E-mail：kokusairikai@bunka.ac.jp Website：http://www.kokusai.com

## 目次

|                    |   |                               |    |
|--------------------|---|-------------------------------|----|
| 巻頭の言葉 学会長挨拶        | 1 | 日中韓協働教材開発プロジェクト報告             | 10 |
| 第20回研究大会報告         | 2 | 博学連携教員ワークショップ2010 in みんな      | 11 |
| 第20回研究大会分科会報告      | 3 | 国際理解教育研究会・「持続可能な社会形成と教育」研究会報告 | 12 |
| 第20回研究大会講演会報告      | 5 | 学会創設20周年記念出版                  | 13 |
| 第20回研究大会シンポジウム報告   | 6 | 2010(平成22)年度総会報告              | 14 |
| 第20回研究大会「特定課題研究」報告 | 7 | 理事会(各委員会等)報告                  | 16 |
| 第20回研究大会参加記        | 8 | お知らせ(これからの行事・イベント案内)          | 17 |
| 国際理解教育研究会・島根研修会報告  | 9 | 事務局通信                         | 18 |

## 巻頭の言葉 学会長挨拶

### 新たな10年に向けて

会長 大津 和子

本学会の第20回記念大会が、永田佳之実行委員長のもとに聖心女子大学で盛大に開催され、これまでの実践・研究の成果が披露されました。次の新たな10年を迎える節目に会長を務めることになり、身の引き締まる思いをしています。

さて、過日、国際連合大学の「サステナビリティと平和研究所」に設けられた「東アジア将来構想フォーラム」に、ゲストスピーカーとして出席してきました。このフォーラムは、「新しい時代の日中韓3カ国を中心にした共同体による地域発展のあり方を考える」ために、文部科学副大臣、国連大学副学長、東アジアの政治および歴史の専門家によって構成された研究会なのですが、そこで「日韓中の協働による相互理解のための国際理解教育カリキュラム・教材の開発」(科研プロジェクト)についての報告が求められたのです。

そこでまず、本学会が「実践と理論をつなぐ」ことを重視しながら実施している各研究プロジェクトや教員研修事業を紹介し、その一つとして、科研プロジェクトの概要について説明しました。そして、具体的な教材として「韓国旅行すごろく」について報告しました。この教材は、日本人児童・生徒が韓国を3泊4日で旅するという設定のもとで、訪れる各地のマスにつくられたクイズに答えたり、「韓国のコマ回し」や「ハングルの解説」といったワークをしながら、韓国の文化や歴史、日本とのつながりを理解

していくゲームです。実践の事前と事後のアンケートをもとに、生徒たちの変容についても紹介しました。

出席者のみなさまからは、「中国や韓国の学校教員をどうやって研究メンバーに加えることができたのか」「竹島などの政治的問題は含めないのか」などといった質問が出され、活発な議論が展開されました。最終的には、「小中学校の段階では、日本と韓国・中国との論争的な政治問題を取り上げるよりも、むしろ、韓国や中国の文化に興味や関心をもち、マスメディアなどを通じて子どもたちにインプットされた一面的でネガティブなイメージを変えることが重要であることが、大変よくわかった」というコメントをいただきました。また、「科研プロジェクトの成果として開発されるカリキュラム・教材を、ユネスコなどを通じて出版し、3カ国での実践をぜひ進めるように」とのアドバイスも受け、大いに励まされました。

以上は、国際理解教育がまさしく現代日本社会の要請に応える教育であることを示す一例であり、本学会の活動には、ますます大きな期待が寄せられています。学校教育においてのみならず、地域においても国際理解教育の実践に取り組んでいくことが、日本の教育の質の向上に貢献することになるとあらためて確信しています。

日本国際理解教育学会のいっそうの発展のために尽力してまいりますので、会員のみなさまのご協力をどうぞよろしく願いたします。

# 第20回研究大会報告

## クロスロードとしての第20回研究大会を終えて

第20回大会実行委員会委員長 永田 佳之



大会会場となった聖心女子大学（マリアンホール）

日本国際理解教育学会第20回研究大会は2010年7月2日～4日、聖心女子大学において開催されました。皆さまのご協力のもとに第20回研究大会を無事に終了できたことに対する安堵感と共に、節目の大会を聖心女子大学で開催する機会をいただいたことの有り難さを、実行委員会一同感じております。

今大会にご参加いただいた皆様は、講演者や30名以上に及ぶ海外ゲスト、大会開催校関係者、学生ボランティアを含めると、計325名となりました。

記念すべき研究大会ということで、準備段階から念頭に置いたことが3点ありました。一つは、国際理解教育の来し方と行く末を考える、過去と未来の接合点として相応しい大会にすること。二つ目は、研究者のみならず実践者も会員の多くを占める本学会の特徴が生かされるような大会にすること。三つ目は、大会そのものをサスティナブルな在り方に近づけるということでした。

上記の接合点は、特に9.11事件以後の世界情勢の中で課せられた国際理解教育の意義を捉え直すという現代的な課題の水平軸と、戦後の国際理解教育の軌跡と今後の方向性を結ぶ垂直軸とが交差する時点でのクロスロードとも言えることができるでしょう。二つの軸が交わる交差点に相応しい大会の企画として、ユネスコ前事務局長の松浦晃一郎氏および東京大学教授の佐藤学氏による二つの特別（基調）講演をはじめ、本学会の到達点と展望と題した記念シンポジウム、シチズンシップ教育をテーマに掲げた特定課題研究シンポジウム、東アジアの国際理解教育等の多彩なテーマごとの自由研究発表69本が設けられました。また、本大会は、韓国ユネスコ国内委員会のESD教員研修としても位置づけられ、韓国の先生方もESDの分科会等に積極的に参加されていました。

大会の発表要旨集録に、グローバルゼーションという荒波に翻弄されず、むしろ時代を切り開いていくような知見や新たなキーワードがこの大会から紡ぎ出されることを願いたいと記しましたが、二つの講演を皮切りに、グローバルな時代文脈を紐解くキーワードが各セッションで飛び交い、実践者と研究者という垣根を越えた形で闊達な議論がなされたことは大きな収穫であったと言えます。ただ、記念シンポジウムをはじめ、いずれのセッションも、これ

までの軌跡と今後の方向性とを討議するには、あまりにも時間的な制約があり、多くの参加者に消化不良感を残したのではないかと反省しておりますが、いかがでしたでしょうか。

さて、大会運営面では、実行委員長の力不足のため、至らぬ点も多々あったかと思いますが、今大会そのものをサスティナブルな在り方に近づけようという、ささやかな試みも行いました。グローバルな情勢下の日常で「つながり」を意識することの大切さについて実行委員の学生達と話し合い、プログラムの節々にちょっとした工夫をさせていただきました。お弁当代金の一部等を途上国への寄付とすることにより大会自体を国際理解の契機とし、持続可能な世界構築に大会そのものが一助となるという仕組みはその一つです。120名のご参加を得た懇親会では、「地元」特産物が皆無に等しい都心での開催を考慮し、フードマイレージの少ない有機野菜の食材をふんだんに使ったお料理や、障がい者の方々が丹誠を込めて育てた葡萄のワインを用意させていただきました。また、持続可能な共同体を支えているのは精神文化であるという学生達の考えに基づき、教会などを巡るキャンパス・ツアーも実施し、国内外の参加者からご好評をいただきました。

なお、大会当日のお弁当代の一部や大会校までの移動距離（マイルージ）を換算した寄付額を約2,700食分のランチ代としてアフリカ諸国への寄付させていただいたことを、この場を借りてご報告いたします。国際理解という名の下での交流が少しでもアフリカの子どもの笑顔につながれば、と祈念してやみません。

本大会は多くの人々のお力添えなしには成り立ちませんでした。会場にて温かく見守って下さった元会長の米田伸次先生をはじめ、韓国や中国を含めた各地（国）よりご参加いただいた皆様一人ひとりに深謝いたします。開発教育教委会（DEAR）、国際協力機構（JICA）、「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）、渋谷区教育委員会、東京都教育委員会、日本ユネスコ国内委員会、文部科学省など、多くの組織よりご後援をいただき、さらには企業やNPO法人の皆様からもご支援をいただきました。最後に内輪の話で恐縮ではありますが、準備段階から〈聖心スピリット〉をいかに発揮してくれた学生達一人ひとりにも謝意を表したいと思います。本当にありがとうございました。



特別記念講演者の松浦晃一郎ユネスコ前事務局長

# 第20回研究大会分科会報告

第20回研究大会の分科会が、7月2日～3日の日程で、聖心女子大学で開催され、14分科会場で充実した発表と熱心な討論が展開されました。今年度は、自由研究発表の件数が69件に達するなど、充実した大会になりました。また、海外からの発表や海外の研究者との共同研究が13件と、本大会は前回を超える、国際学会となりました。7月2日夜には、科研費による3年間の共同研究の2年目になる日中韓教材開発のためのワークショップが開催されました。今大会でも、その共同研究の成果を発表し、協議されました。

では、以下に、自由研究発表の題名と発表者を報告します。

## 研究大会分科会のプログラム

### 第1日（7月3日）第1分科会～第8分科会

#### ■自由研究発表 I-1 331教室

##### <ESD（持続発展教育／持続可能な開発のための教育）>

司会：伊井直比呂（大阪教育大学附属高等学校池田校舎）・石川一喜（拓殖大学）

- (1) ESDに求められる価値観—環境倫理の視点から—  
曾我 幸代（聖心女子大学大学院）
- (2) 多文化アイデンティティ形成におけるESDの役割—内なる多文化共生に向けて—  
小林 亮（玉川大学）
- (3) 葛藤のケアによる学びの編み直しの検討  
横田和子（聖心女子大学）
- (4) ESDFA（万人のためのESD）への助走的研究  
岩本 泰（東海大学）
- (5) 少数民族の文化および言語の持続可能性の実現に向けて～フィンランドセミナーを事例に～  
飯島 真（越谷市立富士中学校・東京大学大学院）

#### ■自由研究発表 I-2 332教室

##### <異文化間教育>

司会：今田 晃一（文教大学）・中山 京子（帝京大学）

- (1) ユネスコ・世界寺子屋運動—話し合い、共感し、参加し、意欲を高め、結びあう人間活動を目指して—  
川上 誠（公文国際学園高等部）
- (2) ものづくりから広がる国際理解—カナダ北西海岸先住民の木箱作りを通して—  
山田 幸生（葛城市立磐城小学校）  
木村 慶太（立命館守山中学校）  
吉田 誠（奈良教育大学）
- (3) 発達段階の相違性を活用するカンボジア協同学習—中学・大学生・高校生間の「学びの交互作用」とその発展性について—  
大滝 修（茨城県立取手松陽高校）
- (4) アイヌの先住民族交流と異文化間理解教育講師育成—事例研究から—  
ゲーマン・ジェフリー（九州大学）
- (5) 「多文化社会における地域コーディネーターのあり方について」～北陸の事例から～  
阿部一郎（財）自治体国際化協会）

#### ■自由研究発表 I-3 333教室

##### <多文化共生>

司会：吉村 雅仁（奈良教育大学）・渡部 淳（日本大学）

- (1) 人種間対立を改善するための教育についての研究—コンタクト仮説によるエリン・グルーウェルの授業実践分析—  
小川 修平（中央大学大学院）
- (2) 多様性を育む「場」に関する一考察—自己と他者への気づきを深めるためのピア・エデュケーションの実践観察から—  
吉田 直子（聖心女子大学大学院）
- (3) 『対話的学びのネットワーク』構築による日韓歴史討論学習  
風巻 浩（神奈川県立麻生高校・首都大学東京）
- (4) 韓国企業における持続発展教育のためのマナビ学的アプローチ  
HAN, Zun-Sang（延世大学）  
HWANG, Tae-Hong（延世大学大学院）
- (5) 韓国の多文化教育の現状分析  
JO, Soo-Jin（延世大学大学院）

#### ■自由研究発表 I-4 334教室

##### <国際交流>

司会：服部 圭子（近畿大学）

- (1) 丸山英樹（国立教育政策研究所）
- (1) 外国人児童と日本人児童の異文化適応に関する研究  
萩原 南（上越教育大学大学院）
- (2) 外国人児童・生徒教育と「公共性」—シカゴ公教育政策「Renaissance 2010」への批判を手掛かりとして—  
福山 文子（お茶の水女子大学大学院）
- (3) 菜食の平和教育的意味  
PYEON, Do-Wook（延世大学大学院）  
SONN, Ka-Yeon（延世大学大学院）
- (4) 多文化概念の比較研究  
KIM, Seong-Gil（光云大学）  
PARK, Jin-Hee（延世大学大学院）

#### ■自由研究発表 I-5 341教室

##### <学校における国際理解教育>

司会：石森 広美（宮城県仙台東高校）・中山博夫（目白大学）

- (1) 国際理解教育における家庭科の役割—生活文化の歴史的理解からのアプローチ—  
木林 祥子（日本福祉大学大学院）
- (2) 国際理解教育の現状と課題—横浜市の小学校教員への調査を通して—  
高田 小百合（聖心女子大学大学院）
- (3) 県立進学校における国際理解教育  
鹿野 敬文（福岡県立福岡高校）
- (4) 英国パブリックスクールにおける柔道教育—イートン校を中心に—  
平沢 信康（鹿屋体育大学）
- (5) ヒト・モノ・チエを活用した「ニーズ対応型」および「創造型」の教育支援活動—桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクトの活動から—  
清水貴恵（桜美林大学）  
岩本貴永（桜美林・草の根国際理解教育支援プロジェクト）

#### ■自由研究発表 I-6 7月3日（土）9:30-11:30 342教室

##### <東アジアの国際理解教育>

司会：大津和子（北海道教育大学）

成田喜一郎（東京学芸大学）

- (1) 価値観の変容をめざした対話的交流の試み～日中大学院生の相互理解を事例として～  
中央大学大学院 津山 直樹  
中央大学 森茂 岳雄  
北京師範大学 姜 英敏
- (2) 中学校社会科における「米」を素材にした教材開発—日中韓の協働による相互理解のための国際理解教育カリキュラム・教材の開発—  
同志社中学校 織田 雪江  
全北大学校 林 慶澤  
埼玉大学 桐谷 正信  
ソウル金北小学校 CHA, Boeun
- (3) ラーメン教材の実践とその分析—中国・北京第二実験小学校での実践を中心に—  
文化女子大学 栗山丈弘  
人民教育出版社課程教材研究所 郭雲霞  
北京第二実験小学校 周晓超  
同志社女子大学 藤原 孝章  
聲浦中学校 徐 京田

#### ■自由研究発表 I-7 7月3日（土）9:30-12:00 343教室

##### <多文化共生>

司会：浅川 和也（東海学園大学）

上別府 隆男（東京女子大学）

- (1) 学芸員養成課程における授業実践の一試み～モノ、自分との対話をめざして～  
近畿大学 近藤 真理子
- (2) コミュニティの特質に応じた多文化共生と保育  
京都橘大学 磯田三津子
- (3) 多文化社会で名前がもつ意味—韓国における国際結婚女性の改名からみえるもの—  
中央大学校 金 仙美
- (4) Research on the perceptions of multicultural education  
Multicultural Museum KIM, Yun-Tae
- (5) 多文化家庭子どもの二重言語教育現況—プチョンジゲ週末学校を中心に—  
梧亭小学校 KIM, Kapsung

#### ■自由研究発表 I-8 7月3日（土）9:30-12:00 334教室

##### <平和教育>

司会：釜田 聡（上越教育大学）

山西 優二（早稲田大学）

- (1) 平和教育研究の到達点と課題—国際理解教育との接点に着目して—  
東京女子大学 竹内 久顕
- (2) ドイツにおけるASPnetを活かした平和教育のESDへの接合性  
フェリス学院大学 高雄 綾子
- (3) かつての敵国との国際理解教育の内容構成について—『独仏共通歴史教科書』を手がかりとして—  
大阪府立三島高校 松井 克行
- (4) 仏独関係の教材化～小学校社会科の戦後史学習における歴史・政治学習の統合的内容構成～  
岩国市立愛宕小学校 松村 淳
- (5) ガンディーの共生観と平和観に関する一考察  
上越教育大学 田島弘司

第2日(7月4日)第9分科会~第14分科会

■自由研究発表Ⅱ-9 7月4日(日) 9:00-11:30 331教室

<ESD(持続発展教育/持続可能な開発のための教育)>

司会:小関 一也(常磐大学)

小林 亮(玉川大学)

- (1) 日本におけるESD実践校の可能性と課題ーホールスクール・アプローチの視点からー  
聖心女子学院初等科 水野 涼子
- (2) アジアにおける“ESD国際カリキュラム”の開発ー韓国、中国、タイ、フィリピン、日本での協同開発と実践報告ー  
大阪教育大学附属高校池田校舎 伊井 直比呂  
大阪府立北淀高校 大島 弘和  
羽衣学園高校 米田 謙三  
大阪教育大学附属高校池田校舎 田中 誠一  
大阪教育大学附属高校池田校舎 吉村 勇治
- (3) ドイツにおけるユネスコスクール制度と教師のイニシアチブ  
国立教育政策研究所 丸山 英樹
- (4) ユネスコスクールにおける新カリキュラムの創造ーWHE・ESDにもとづく『総合学習』再編の取り組みー  
奈良女子大学附属中等教育学校 北尾 悟
- (5) <持続可能性>と高等教育における授業実践ー「地球データマップ」を活用した基礎課程演習のアンケート調査分析ー  
聖心女子大学 永田 佳之

■自由研究発表Ⅱ-10 7月4日(日) 9:00-11:50 332教室

<東アジアの国際理解教育>

司会:田淵 五十生(奈良教育大学)

吉田 敦彦(大阪府立大学)

- (1) ICTを活用した異文化理解教育ー日韓昔話に関するデジタル紙芝居制作を通してー  
立命館守山中学校 木村 慶太  
ソウル大学校 韓 敬九  
葛城市立磐城小学校 山田 幸生  
文教大学 今田 晃一
- (2) 「人の移動」(留学生)をテーマにした日韓中三か国教材開発ーインタビューおよび読み物資料を用いてー  
近畿大学 服部 圭子  
Kangwon National University Han, Geon-Soo  
中央大学 森茂 岳雄  
帝京大学 中山 京子
- (3) Peace Education in relation to EIU in Korea Hanshin University Kang, Soon-Won
- (4) 韓国理解を深めるすごろく教材の開発  
北海道教育大学 大津 和子  
北海道教育大学大学院 遠藤 沙織  
恵庭市立若草小学校 東峰 宏紀  
恵庭市立若草小学校 田中 孝治
- (5) 「日韓中の協働による相互理解のための国際理解教育カリキュラム・教材の開発」ーBグループ「人間関係」の研究概要ー  
上越教育大学 釜田 聡  
目白大学 中山 博夫  
漢南大学 許 信恵  
目白大学 多田 孝志  
同志社香里中・高校 西村 克仁  
江別市立大麻東小学校 堀 幸美  
目白大学 若井 知草  
APCEIU(アジア太平洋地域国際理解教育センター) 金 宗勲  
Sangdong Junior High School 金 多媛  
鄭州中学校附属小学校 祖国華

■自由研究発表Ⅱ-11 7月4日(日) 9:00-11:30 333教室

<開発教育>

司会:飯島 真(越谷市立富士中学校)

藤原 孝章(同志社女子大学)

- (1) 国際理解教育における方法論の再検討(II)~JICA国際協力出前講座に注目して~  
横浜市立上の宮中学校 中和悠
- (2) 高校生による「仮想世界ゲーム」実施報告ー南北貿易ゲームを超えるESDアクティビティとしてー  
大阪市立南高校 辻 良隆
- (3) 「貧困」から学ぶ国際理解ーエンパワーメントの視点からー  
上越教育大学 河内 高史
- (4) シリアスゲームで学びは深められるのか~参加型学習における新しい教育方法論の模索~  
拓殖大学 石川 一喜
- (5) 意欲と学力の低い高校生に対する開発教育ワークショップ実践  
神奈川県立大楠高校/日本福祉大学大学院 小野 行雄

■自由研究発表Ⅱ-12 7月4日(日) 9:00-12:10 341教室

<多文化共生>

司会:風巻 浩(神奈川県立麻生高校)

田尻 信壹(富山大学)

- (1) ボンダンスの繋ぐ過去と未来-多文化共生社会ーハワイ州マウイ島から見えてくるものー  
国立北九州工業高等専門学校 荒川 裕紀
- (2) ポストコロナルの視点から「南の島」を考えるーゲーム理解を事例にー  
帝京大学 中山 京子
- (3) 日本統治期台湾の学校教育における植民政策の影響について  
新潟市立牡丹山小学校 真島 拓也
- (4) 戦前期マニラ日本人学校における現地理解教育ー『フィリピン読本』(1938年)の分析をとおしてー  
中央大学 小林 茂子
- (5) 判決書を活用した日韓授業開発研究ーいじめ事件判決の教材・授業研究ー  
上越教育大学 梅野 正信
- (6) 国際交流にチャレンジ「YES WE CAN!!~せかいなかよしクラブ~」  
桜美林大学 穴戸 佳子  
相模原市立宮上小学校 遠藤 悠子

■自由研究発表Ⅱ-13 7月4日(日) 9:00-12:00 342教室

<シティズンシップ教育>

司会:宇土 泰寛(相山女学園大学)

嶺井 明子(筑波大学)

- (1) イギリスにおける開発教育からグローバル・シティズンシップ教育への転換~順応か新たな展開か~  
青山学院大学 服部 由起
- (2) シティズンシップ教育の知見を生かした小学校における「社会参加型」国際理解教育  
鹿児島大学大学院/鹿児島市立中山小学校 藤崎隆博
- (3) 多元的社会における市民性(シティズンシップ)のあり方ー公的・私的議論をふまえた再帰的市民性の構築へ向けてー  
桃山学院大学非常勤講師/関西大学大学院 大野 順子
- (4) グローバルシティズンシップに関する短期大学生の意識調査  
関西外国語大学短期大学部 笠井 正隆
- (5) 高校生からのグローバルシティズンシップに関するアセスメント  
宮城県仙台東高校 石森 広美
- (6) 愛媛大学における学生リーダーシップ養成の試み~社会貢献に求められるコンピテンシーの基盤養成~  
愛媛大学 泉谷 道子

■自由研究発表Ⅱ-14 7月4日(日) 9:00-11:30 343教室

<コミュニケーション>

司会:桐谷 正信(埼玉大学)

横田 和子(聖心女子大学)

- (1) 多文化共生のための地域日本語教育における教材開発ー「ことばと文化」という視点からの教材分析ー  
早稲田大学大学院 宮野 祥子
- (2) 国際交流事業で育むグローバル・コミュニケーション能力ー奈良女子大学附属中等教育学校の実践からー  
奈良女子大学附属中等教育学校/立教大学大学院 南 美佐江
- (3) 異文化コミュニケーション能力の育成に向けた国際理解教育の実践:日本人学生と留学生の授業外共同プロジェクト活動を通して  
目白大学 前田 ひとみ
- (4) 高等学校英語科教員はWorld Englishesをどのようにとらえているかー授業内での扱いに関するアンケート調査の結果から  
明星中学高等学校 和田 俊彦
- (5) 異文化理解に必要な言語能力とは何か  
エアランゲン・ニュルンベルク大学 ベーター・アッカーマン



# 第20回研究大会講演会報告

## 20周年記念講演報告

目白大学 多田 孝志



国際理解教育の課題と未来への可能性を語る佐藤学先生

第20回記念大会では、東京大学大学院教授、佐藤学先生に「21世紀の学校における国際理解教育」を演題に記念講演をしていただいた。この講演の概要を報告する。なお、佐藤先生は、本学会の研究紀要に論考をご寄稿くださることになっている。本稿では紙幅に限りがあり、詳細に記せなかった部分については、研究紀要の第17号をご高覧願いたい。

### 1. 講演の主題

「国際理解教育」は、日本特有の概念である。この固有性は何に由来しているか、その枠組みが何らかの問題を抱えているとすれば、どう認識し、どう解決すべきか、またグローバリゼーションは「国際理解教育」にどのような革新を要請しているのか、21世紀の学校におけるグローバル教育が開く可能性とは何か、について理論的かつ実践的に検討する。

### 2. 「国際（理解）教育」の再概念化の必要

「国際理解教育」の諸概念それ自体が国際化される必要がある。「国際理解」の日本的特質に、明治初期の翻訳の構造に由来する異文化摂取の枠組みの構造がある。この「翻訳＝近代化」は、一方向の「異文化理解」となり、他者の固有性（singularity）と多様性を無視し、他者と出会わず、自己を脅かさない「国際理解」の悪しき伝統を形成した。

### 3. 国際理解の歴史的呪縛

一方的表象による他者認識（植民地主義の再生産）＝同化・差別・排除の構造、「外人」として一元化された多文化認識、単独性（singularity）を捨象した異文化理解＝了解不能な他者との出会いの回避、また文化本質主義の「日本文化論」＝ナショナリズム「グローバル化＝国際化」の限界、さらに、外からのまなざしを捨象した自己認識「ひきこもり」による独善的世界認識が指摘できる。

### 4. グローバリゼーションによる学校教育の歴史的転換

近代学校＝国民国家の統合、産業主義社会の形成の二つ

の存立基盤がグローバル化により崩れた。このことは学校教育の歴史的転換をもたらした。「国民」の教育から「市民」の教育へ、中央集権的統制から分権改革へ、「プログラム型」から「プロジェクト型」のカリキュラムへ＝「量」から「質」へ、一斉授業から協同的な学び、への転換である。

### 5. 21世紀の学校の四つの課題

①知識基盤社会への対応＝「量」から「質」へ、「意欲」から「意味」へ ②リスク格差社会への対応（学ぶ権利の保障、多様性にかかれた平等）、③共生社会への対応（多文化教育）、④市民社会の成熟への対応（市民性の教育）の4つに収斂できる。

### 6. 「国際理解教育」から「グローバル教育」へ

グローバル教育の問題領域には、市民性の教育・多文化教育・ESD教育・平和教育がある。グローバル教育は、新自由主義、新保守主義、民主主義・共和主義、新左翼のグローバル教育に大別できる。民主主義・共和主義のグローバル教育・多元的多層的な市民性の教育は、リベラル国際主義、コスモポリタン、世界規模の共和制の希求に類型化される。

### ＜グローバル教育の課題と可能性＞

課題として、「包摂（inclusion）」か「排除（exclusion）」か、個々人の皮膚が「国境」を形成できるか、敵・戦争の偏在化、先進諸国の内部に「第三世界」が出現、移民と並んで子どもと若者と女性が虐げられていることへの対応が指摘できる。

グローバル教育の可能性として次の諸点が列挙できる。

①グローバル化によって「国民」の枠を超えた「市民」の教育の実現。②地域と日本と世界（アジア）を「串刺し」にする教育の実現。③文化においてグローバル都市の国内の出現。④国民国家の政治的境界線を越えて「アジア共同体」の連帯が形成されつつある。

### 7. 結論

国際（理解）教育のグローバル化をすすめ、異文化認識の歴史的呪縛（一方的表象の翻訳構造、植民地主義の認識枠組み）から解放させるべきである。また、グローバル教育は多元的複合的市民性の教育を実現し、その実践と理論の多様性を尊重して展開されることが望ましい。グローバル教育は他者の認識による世界の認識であり自己の再認識である。

佐藤先生の熱意溢れる講演に参加した一同、感銘を受け、鋭い視点、広い視野からの確かな指摘は、今後の本学会の研究・実践活動に多くの指針を与えていただいたと感謝した。

# 第20回研究大会シンポジウム報告

## テーマ：日本国際理解教育学会の到達点と展望

### －会員参加型ワークショップの試み－

同志社女子大学 藤原 孝章

#### 野心的な試み

今回のシンポジウムは、第20回記念大会のため学会理事会の主催により、「日本国際理解教育学会の到達点と展望」と題して行われた。前回19回大会で試行した参加型ワークショップを取り入れ、シンポジウムの講演や提起に頼らず、今まで学会を支えてきた会員、これから続こうという会員が、全員でテーマについて話し合い、思いを共有し、認識を深めていくものとした。



分科会の様子1

#### シンポジウムの構成

1. 趣旨説明とシンポのすすめ方 (10分) 藤原孝章 (同志社女子大学)

2. 全体会1 (30分)

米田伸次前会長：日本国際理解教育が切り開いてきたもの

大津和子副会長：日本国際理解教育の到達点と課題

<移動>

3. 課題別分科会 (70分)

(A)「国際理解教育の理論と実践をつなぐ」

・司会進行：成田喜一郎 (東京学芸大学)・横田和子 (聖心女子大学)

・記録報告：祐岡武志 (奈良県立法隆寺国際高校)・南美佐江 (奈良女子大学附属中等教育学校)

・課題提案：渡部淳 (日本大学)・伊井直比呂 (大阪教育大学附属高等学校池田校舎)

・会員&一般参加者

(B)「国際理解教育の学習領域をつなぐ」

・司会進行：石森広美 (宮城県仙台東高等学校)・野中春樹 (広島なぎさ中・高等学校)

・記録報告：山中信幸 (柳学園中・高等学校)・磯田三津子 (京都橘大学)

・課題提案：中山京子 (帝京大学)・小関一也 (常盤大学)

・会員&一般参加者

(C)「国際理解教育の学校と外部をつなぐ」

・司会進行：石川一喜 (拓殖大学)・北山夕華 (名古屋大学)

・記録報告：福山文子 (JICA横浜海外移住資料館)・今田晃一 (文教大学)

・課題提案：森茂岳雄 (中央大学)・山西優二 (早稲田大学)

・会員&一般参加者

<移動・休憩>

4. 全体会2 (50分)

レポーターによる各分科会の報告 10×3

全体でのふりかえり (藤原孝章)

まとめ：学会の未来に向けて (多田孝志会長)

#### 分科会での話し合い

議論としては、20周年を記念して出版された『グローバル時代の国際理解教育-実践と理論をつなぐ-』(明石書店)をもとに、「3つのつなぐ」をキーワードに課題の共有を行った。分科会では、グループに分かれての討論や顔の見える机の配置での話し合いなど工夫が施された。分科会の参加者は各40~60名(全体で150名ほど)であった。それぞれの内容は、報告をまとめると以下の通りである。



全体会での報告

#### 分科会A

最初に、渡辺淳氏がライフストーリーにふれながら、自身の実践と創設期(1991年)からの学会の活動について報告した。国際理解教育の定義とともに、理論的整理が困難だったことが示された。次に、伊井直比呂氏から、大阪府の同和教育との関わりの中で、徐々に国際理解教育が受け入れられ、教育課題の解決に向けての実践が進んだことが報告された。話し合いでは、たとえば、<現場の人間(教師)から見て、目標と理論をどう関係付けなければならないのか>という参加者の問いに対して、<生徒の現実を見て、どうすればいいのか考えることから様々な課題に向けて対応できる。その個性から一般性への転換が行われれば、「理論」とよべるのではないかと><「実践」から理論を立ち上げるには、相対化=客観化が必要。具体的にはそれは言語化すること。言語化により共通したツールとして使えるものが「理論」になるのでは>という応答がなされた。

#### 分科会B

最初に、中山京子氏から学習領域をつなぐキーワードとして、「当事者意識」「専門領域」「カリキュラム創造力」「行動力」の4つがあげられた。小関一也氏からは、グローバル化する世界を表す言葉として「つながり」があげられた。いろいろなもの「つながり」、その「つながり」方も様々で、常にダイナミックに変化するとの指摘があった。参加者には、教師自身が当事者としての視点で様々な問題を見つめ、その解決に向けて行動できる力を身につけることによって、教師の「ネットワーク」が広がってゆくこととなる。そして、そのような取り組みを続ける教師こそが、「ヒト」とつながり、様々な専門領域をつなげ、「学習領域」を超えた教育実践を可能にする教師になり得るのだという展望が得られた。

#### 分科会C

森茂岳雄、山西優二両氏より、「国際理解教育における『学校-社会連携』の意義と可能性」および『「地域のつながり」からみるこれからの国際理解教育』と題した課題提案が行われた。次に、これらの提案を受ける形で、フロアの参加者が、各自の具体的経験などを踏まえて、これまで学校と外部をつなぐことによって何が生まれてきたのか、課題、アイデア、知恵などを含めて話し合った。そして「つなぐことにより得られる利点」、「つなぐことに関する課題・難しさ、目指すべき方向性」、「その他」の3領域が明確になった。双方向的な出会いやつながりの中で新しいものが生じるとの指摘、あるいは互恵性のある、ともに主体である関係性の築き方への着目など、注目すべき意見が多数発信された。



分科会の様子2

## 第20回研究大会「特定課題研究」報告

### 「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」をテーマに実施

筑波大学 嶺井 明子



テーマについて発表するパネリスト

#### 課題研究の趣旨

この研究プロジェクトを立ち上げた背景には、グローバル時代に生きる市民を育成する上で「国際理解教育」は極めて重要な教育であるはずなのに、学校での取り組みは後退しているという認識があった。「学力」中心主義、英語活動のみへの矮小化、日本の伝統・文化理解教育の強調といった傾向への危惧があった。同時に改訂教育基本法（2006年）に盛り込まれた「郷土や国を愛する心」の育成と国際理解教育の関係をどう整理し位置づけるのかという古くて新しい課題意識もあった。

今日、グローバル化が急速に進展する中であってどのようなシティズンシップが必要とされているのか、それは日本の国際理解教育の概念や理論、実践にどのような変容を迫るのか。北海道大会で提起された「転換期の国際理解教育」の課題をふまえ、これからの国際理解教育のあり方を共に考えたいというのが当初の趣旨であった。

プロジェクト発足当初から公開研究会を開催して研究を継続してきた。本学会の1999年当時の「国を問う」課題研究、イギリスやイスラム（トルコ）にみるシティズンシップ（教育）、ユネスコのESDにみるシティズンシップ、欧州評議会のEDC（Education for Democratic Citizenship）にみるシティズンシップ（欧州評議会の担当者であるアプス氏による講演）、などなどをふまえ、大会報告につなげてきた。

#### 研究大会報告の概要

司会者（嶺井）から、シティズンシップの観点からユネスコが提唱した国際理解教育の推移の概観・整理、日本の国際理解教育の特質と課題について簡単に報告がなされた。本課題研究では、グローバル時代のシティズンシップとしてmultiple citizenship、multiple identityに注目し、ローカル、ナショナル、リージョナル、グローバルの多層的構造・関係に焦点をあてて国際理解教育のありかたを提起したい旨の報告があった。

岡崎裕会員（プール学院大学）からは「グローバル時代

のローカルシティズンシップ～“グローバル”は地域に詰まっている～と題した報告がなされた。「グローバル時代」といわれる現代において地域（まち）に生きる人間（ヒト）として、私たちに何ができるか、また為さねばならないのか、「ローカル・シティズンシップ」の視点から国際理解教育を再構築する提案がなされた。

小関一也会員（常磐大学）からは『「グローバルなもの」の見方（global perspective）を育む国際理解教育』と題した報告がなされた。global perspectiveを鍵概念としてglobal citizenshipの育成についての再考がなされ、global perspectiveの多元性・多層性を正しく理解することや、「世界の探求」と同時に「自己の探求」が重要であることなどが提言された。

中山あおい会員（大阪教育大学）からは、「ヨーロッパの“アクティブ”シティズンから考える」と題した報告がなされた。欧州評議会とEUを事例として、キー概念である「アクティブ・シティズンシップ」についてその理念や具体的活動事例が報告され、重層したコミュニティ（ローカル、ナショナル、リージョナル、グローバル）への参加など日本への示唆がなされた。

桐谷正信会員（埼玉大学）からは、「グローバル時代の多文化的歴史教育におけるシティズンシップの育成」と題し、アメリカの歴史カリキュラム改革を事例に、歴史教育を通じた多文化的シティズンシップの育成について報告された。グローバル時代の国際理解教育におけるnational citizenshipの再考、育成するnational citizenshipを多文化的シティズンシップへ転換する必要性、多文化的歴史教育の重要性が提起された。

最後に宇土泰寛会員（椋山女学院大学）から、各報告者の提案を踏まえて、実践の場にどう返しなが、今回の課題を詰めていくのか、事例をふまえながらコメントがなされた。

#### 今後の課題

大変大きな研究課題であり、残された課題が多々ある。現在、学会研究大会での質疑をふまえ、学会紀要に研究成果を報告する準備を進めている。



フロアとのディスカッションの様子

## 第20回研究大会参加記

### 共創型対話から学習領域をつなぐ

中国人民教育出版社課程教材研究所 郭 雯霞



立つ高さによって人の視野は違っているし、視点によって多角的な考え方は形成されます。私は東京へ来て日本国際理解教育学会の主催した第20回研究大会に参加して、しみじみとそのことを感じました。

私は、現場でどのように国際理解教育を実践したら有効で、深化していこうかということに関心を持っています。

中山京子先生は、学習領域をつなぎ豊かな実践をつくるため、「当事者意識」「専門領域」「カリキュラム創造力」「行動力」という四つの要素を提言されました。この四つの要素は、正に現場の先生にとっては国際理解教育を実践する重要なキーワードになります。そして、これに対して、ワークショップ形式で、違った地方や学校から参加した先生たちが、それぞれの経験、学習事件、考え方、悩みなど話し合っていました。私はその一つのグループに参加し、その先生たちの話から、以下の3点を学びました。

- (1) 子どもとの対話の中で、教師自身の当事者意識だけでなく、子どもの考えを聞き、受け入れ、学習領域をつなげることができる。そして教師からの押し付けもないし、子どもを尊重して自然につながる。つまり教師自身の当事者意識と子どもの当事者意識は相互作用し、共に新たな探求問題や知見や価値を作り出すこと。
- (2) 教師は、子どもの学習を守ると同時に、専門領域から子どもに対しての指導のあり方や、他領域への理解及びつながりも見えてくること。そういうつながりは、小関一也先生が提言された「教室の学習」と「世界の現実」、「自己の探求」と「世界の探求」、「教えること」と「生きること」などのつながりとなる可能性があること。
- (3) 教師と子どもとの共創型対話から、教科の枠を超えてのカリキュラム創造力は形成されること。そしてそのための教師の行動力も必要になり、そういった行動力がなければ、視野や人間関係、学習領域は広がらず、結局単なる「教室の学習」や「教えること」に止まってしまうということ。

中国では、まだ国際理解教育学会という学会や、理論研究と現場実践が一体化した団体・機関紙は、まだ成立していないのが現状です。ですから、私は日本の国際理解教育学会の研究大会という非常に貴重な場に参加させていただき、多様な人々やその知見に出会うことができ、多様な視点から学べて、本当に幸いでした。

### 国際理解教育学会第20回大会に参加して

日本学術振興会特別研究員PD 橋崎 頼子

今回、学会への参加を通して、多く示唆と学びへの刺激を得ることができました。ここでは、特に印象深かった以下の2点についてご報告させていただきます。

まず、学会創立20年の歩みの振り返りと、今後の方向性の議論が行われたことです。学会が、実践の提案の積み重ねによって発展してきたことや、その集大成として今回本が刊行されたことが報告されました。これらの報告は、本学会が、これまで国際理解教育の分野で果たしてきた大きな役割を改めて感じさせるものでした。また分科会では、今後の課題である「理論と実践をつなぐ」「学習領域をつなぐ」などが取り上げられ、様々な提案がなされました。私が参加した「学校と外部をつなぐ」の分科会では、「ネットワークのためのネットワークづくり」や「共通の課題を明確にした上での期限付きネットワークづくり」の必要性などが提案されました。

次に印象深かったのは、「多層的・多元的市民性」の育成が、自由研究発表、基調講演やシンポジウムのテーマの一つとして議論されたことです。どの地理的レベルに属するのか、経済のグローバル化にどのように対応するのかなどにより様々な立場が考えられるが、「どれが正しい市民性なのか」ではなく、異なる市民性の位置関係の明確化と議論の重要性が話されました。また、「ナショナリズム」と同義でない「ナショナルレベルの市民性」の可能性についても議論されました。さらに、その前提として、ステレオタイプ的な見方や、知ったつもりになって他者と出会わない態度の反省に関する研究も多くみられました。例えば、日・中の学生に、互いの文化に対するイメージを提示させ、その中に含まれるステレオタイプを検証させるという共同研究の実践報告があり、大変勉強になりました。

最後になりましたが、温かく迎えて下さった聖心女子大学の皆様、学会関係者の皆様に心よりお礼を申し上げます。





# 国際理解教育研究会・島根研修会報告

## 日本国際理解教育学会 実践研究会 in 出雲 21世紀の人間形成 ～子どもの対話力をどう育てるか～

島根県出雲市立伊野小学校 山口 修司



パネルディスカッションから学ぶ

8.6(金)、島根県国際理解教育研究会との共催で、伊野小学校と伊野コミュニティセンターを会場に開催された。内外から約90名の参加があった。午前は授業公開と研究協議、午後からはパネルディスカッションと多田孝志前会長(目白大学)の講演を行った。

### 授業研究 ～6年「広島から平和を考える」～

授業者：福田秀治(伊野小学校)

まず、「平和」とはどういうことか意見交換した後、広島平和記念式典における「平和への誓い(こども代表)」(2009年)を視聴した。そして、この誓いの中で問いかけている「平和になるために私たちができることは何か」話し合った。子どもたちは、9月の修学旅行に向けて、ブックトークなどによって戦争・平和について学習を進めているが、本時もその一環である。協議会では次の意見が出た。「身近な平和と世界の平和をどう結びつけるかが課題である。」「ペア対話がうまく機能し、1時間の中で子どもの変容が見られた。」「単元全体で共有するところに対話をもっていくべきではないか。」など。講評では、多田孝志氏から次の点が指摘された。①様々な平和をまとめる知見を教師がもつ。②人から意見を言ってもらえることはいいことだと子どもが感じる授業をつくる。③いろいろな視点から出る意見をほめる。

### パネルディスカッション ～対話力を育てる～

コーディネーター：今田晃一(文教大学)

パネリスト：中山博夫(目白大学)

小嶋祐何郎(奈良教育大学附属中学校)

伊藤雅美(島根県松江市立乃木小学校)

荒川仁美(島根県安来市立広瀬小学校)

中山氏からは、小学校外国語活動は子どもの対話力を育てるよい機会であること。そして、新しい分野に取り組む際に必要なのは、自由に対話のできる教師集団であることが大切との指摘があった。小嶋氏からは、ESDの実践を

もとに対話力を育てる試みが提示された。そこには、持続可能で豊かな共生社会を構築する人間として必要な資質としての対話力について提示があった。次に、伊藤氏からは、長年取り組んだNIEにおける提示があった。子どもたちが新聞に親しみながら、一つの記事から感じ取ったことをもとに対話する実践が話された。荒川氏からは、話し合えば花ひらくという考えで学級経営をしてきたこと。そして、子どもが本来もっている、話すことは楽しいという気持ちをいかに教師が引き出すか実践例をもとに提示された。

### 講演「21世紀の学習方法と対話」

講師：多田孝志(目白大学)

講演では、対話の楽しさの実践・自己肯定感の育成・他者のよさの感得・事実を改善していく体験といった、対話のよさを感じ取る必要性が示された。そして、対話型授業を創る留意点が指摘された。①多様な出会いの場面を意識的に設定する。②対話場面を明確にする。③考え想いをめぐらす時間を保障する。また、効果的な対話場面の設定として、「対話を中心活動とする授業」なのか、「対話をプラスワン、あるいはスパイスする授業」なのかを決めておくことが大切であるとの話があった。効果的な対話場面の設定に最も重要なのは教材研究であり、子どもの実態をふまえた子どもの視点からの検討の必要性が指摘された。以上、多田氏から、公開授業やパネルディスカッション、そして様々な実践例をもとに対話を基軸としたこれからの学習づくりについて示唆にとんだ話を聞くことができた。参会者から「わかりやすく、たいへん参考になった。」「2学期からの授業づくりのヒントをたくさんいただいた。」との感想が寄せられた。

おわりに、積極的に議論が交わされ、参会者同士が対話をする場面も多く、充実した実践研修の一日となった。



ペア対話で平和について考える

# 日中韓協働教材開発プロジェクト報告

## 2010年度第1回会議および大会発表

帝京大学 中山 京子



会議で挨拶される韓国国際理解教育学会韓敬九会長

「日韓中の協働による相互理解のための国際理解教育カリキュラム・教材の開発」の2010年度第1回全体会議・グループ会議が大会前日の7月2日に聖心女子大学で開催された。韓国・中国からの飛行機が遅れたこともあり、会議時間は1時間半程度となったが、その後懇親会が開かれ、また、大会の合間をぬって各グループが小会合をもつなどして、プロジェクトを進めることができた。現在この教材開発に関わっているのは、食文化（ラーメン）グループに栗山丈弘、藤原孝章、HAN Kyung-Koo、SEO Gyung-Jeon、郭雲霞、周晓超、食文化（米）グループに桐谷正信、織田雪江、CHA Boeum、YIM Kyung-Taek、人間関係（付き合い方）に釜田聡、堀幸美、西村克人、HEO Sin-Hye、KIM Da-Wom、KIM Jong-Hun、祖国華、人間関係（言語）に多田孝志、中山博夫、若井千草、KIM Jong-Hun、陳紅、人の移動（ツーリズム）に大津和子、東峰宏紀、田中孝治、KIM Kwang-Hyun、人の移動（移民）に中山京子、森茂岳雄、服部圭子、HAN, Geon-Soo、YOO Chul-In、趙克玲である。

昨年度に構想した教材を各国で実験授業にかけて改善を図るとともに、さらに教材を開発することが今年度の目的である。2011年度には、開発した教材を発達段階に応じて構造化し、単元カリキュラムを作成し報告書を作成することを目標としている。大会では、「中学校社会科における『米』を素材にした教材開発—日中韓の協働による相互理解のための国際理解教育カリキュラム・教材の開発—」「ラーメン教材の実践とその分析—中国・北京第二実験小学校での実践を中心に—」「『人の移動（留学生）をテーマにした日韓中三か国教材開発—インタビューおよび読み物資料を用いて—」「韓国理解を深めるすごろく教材の開発」、「『日韓中の協働による相互理解のための国際理解教

育カリキュラム・教材の開発』—グループ『人間関係』の研究概要—」が発表された。2日に十分時間が取れなかった分、各発表会場には関係者が集まり議論を深めた。

### 今後の予定

これから秋にかけて国内でグループ会議を行い、11月には韓国での大会に合わせて行う予定である。残念ながら韓国の大会日が、日本国内の各学会の大会日などと重なるため、三か国会議が十分に開催できないことが予想される中、一方で大会に併せた短い時間での会議よりも授業実践を参観しあおうという気運が高まり、3月に中国で実施されたラーメンに関する授業参観に続き、それぞれのグループで授業参観のプランが立ち始めている。10月には韓国でラーメン又は米に関する授業を、来年3月には中国で人の移動（移民）に関する授業を見学する企画がある。また、人の移動（ツーリズム）グループでは、日本人メンバーによって試作された「韓国の旅」のすごろく教材を韓国、中国グループが持ち帰って、各国語に翻訳しそれぞれを活用した授業を実験的に行う予定である。

北海道で行われた17回大会の時に、日韓の学会間における形式的な交流段階は終わって、確実に協働段階に入っていると感じたが、ここ1、2年は葛藤の段階でもあるように思われる。というのは、深い協働をするためには考え方や進め方の相違、言語の壁を乗り越えなければならず、表面的な協働では済まなくなっているからである。しかし、これはむしろよい意味での葛藤であると捉えている。互いに微妙な認識のズレを感じながら、ときには小さな不満をこぼしながら、まさに国際理解をメンバー自身が進めているとあってよいだろう。来年度はまとめの年を迎える。大会に併せた慌ただしい会議ではなく、じっくりと膝をつきあわせてまとめの作業をおこなえるようにできないか検討中である。



懇親会では聖心大学卒業生の相澤瑞穂さんによる獅子舞が登場。

# 博学連携教員ワークショップ2010 in みんなく

## 学校と博物館でつくる国際理解教育

### — 新しい民博展示を活用する —

奈良女子大学附属中等教育学校／立教大学大学院 南 美佐江



言語セクションの見学—各国語で『はらべこあおむし』

8月5日、猛暑の大阪。国立民族学博物館・日本国際理解教育学会共催による、博学連携教員ワークショップ2010 in みんなく「学校と博物館でつくる国際理解教育—新しい民博展示を活用する—」に参加した。

#### 第1部 講演とミュージアム・ツアー

開会挨拶で、国立民族学博物館館長・須藤健一氏は、「モノとの出会い」をキーワードに民博の資源の教育への有効活用について述べられ、日本国際理解教育学会会長・大津和子氏は、この共催ワークショップの魅力について語られた。

奈良教育大学教授・田淵五十生氏は、講演「世界遺産教育と博物館の活用」の中で、「あずかりもの」としての世界遺産という視点から、人と遺産との関わりにふれながら、モノとヒトが語る博物館の活用を強調された。

奈良県葛城市立磐城小学校教諭・山田幸生氏の実践事例報告「日本版みんなくをマレーシアへ」では、山田教諭の前任校の児童たちが総合的な学習の時間に制作した「日本版みんなく」が会場に展示され、子どもたちの生き生きした視点と異文化への主体的な学びの経緯を見ることができた。

みんなくミュージアムパートナーズ(MMP)による、特別支援学校受け入れ実践の紹介のあと、参加者は3つのグループに分かれて、ミュージアム・ツアーへ。リニューアルされたばかりの「西アジア」「音楽」「言語」の三つのセクションで、専門家の方々の説明を伺いながら、多様なモノや映像に目を奪われた。以前筆者が見学した際には見られなかった、メッセージ性あふれる展示はどれも非常に興味深かったが、時間的な制約のため、駆け足で回らなければならなかったのが残念だった。

#### 第2部 ワークショップと振り返り

午後は7つのワークショップが行われた。

- ① 民博のデジタル・コンテンツを利用した授業づくり
- ② 仮面をつくって語って異文化理解
- ③ 「思いを込めた音」って何だろう？
- ④ ことばの不思議・魅力
- ⑤ 裏側みせます—「じゅうたんをつくらう！」を通して

⑥ コーヒーモノガタリーみんなく篇

⑦ アフリカ・アカン族「砂金秤の分銅」づくり

大津和子会長が挨拶でおっしゃったとおり、心地よい空間の中で民博の豊かなモノたちに囲まれ、専門家の方々から知的刺激を受けながら、参加者一同有意義な時間を過ごした。

ワークショップ後、日本国際理解教育学会前会長・多田孝志氏が「これからの教師にとって必要なものとは何か」という視点から、以下のように各ワークショップを講評された。

⑦は、今の学校教育で欠けていると思われる「沈黙の重要性」を考えさせる。

⑥では、生業の文化から世界のシステムが見えてくる。ここでは教師の工夫、視点が重要。

⑤は、市民パートナーとの共同作業。多様な教育資源との協働による「知の拡大」である。

④では、民博の素晴らしい展示から、ことばの豊饒性を教えられた。

③は、学びとは「他者と何かを作り出すこと」である、と教えてくれる。

②は、今まで隠れていた自分の持つ豊かな世界に気づかせてくれる。

①は、教育の中で新しい学びの形を作るものである。

国立歴史民俗博物館の佐藤優香氏は、映像で一日を振り返りながら、学びとは新しい文化創造であること、博物館利用により子どもたちが文化を創造することに気づく、「共創」のための博学連携を強調された。

最後は、日本国際理解教育学会副会長の中央大学教授・森茂岳雄氏が挨拶のなかで、学会と民博が共同してワークショップをすることの意義をもう一度強調され、閉幕となった。

今回は初めての試みとして、ワークショップ終了後、参会者とスタッフのカフェ懇親会が開かれた。

フェアトレードのコーヒーとお菓子とで、和やかな情報交換の場となった。そこで筆者は国立民族学博物館の中牧弘允氏のお話を聞く機会を得た。民博は毎年2つのコーナーをリニューアル、パワーアップしており、「これからもますますやりまますよ」と力強くおっしゃったのが印象的で、民博の魅力の原動力であると感じた。

皆さん、新しい民博に教育の新たな場を求めて、ぜひ来年も参加しましょう！

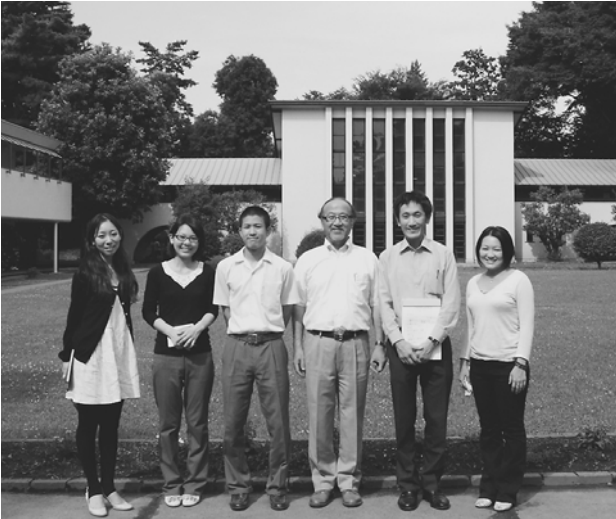


『思いを込めた音』って何だろう」ワークショップ

## 自由学園でESDを考える

### — 自由学園訪問記 —

玉川大学 小林 亮



男子体育館の前で（右から2人目が筆者）

#### はじめに

「自由学園」をご存知ですか？自由学園は、思想家でジャーナリストであった羽仁もと子・吉一夫妻により、「思想しつつ 生活しつつ 祈りつつ」をモットーとして、1921年に創立された学校です。画一的な学校教育ではなく、子どもの自由で創造的な体験を重視するその教育理念は広く内外の注目を集めてきました。聖心女子大学の永田佳之先生を代表とする本学会の特定課題研究「持続可能な社会形成と教育」研究会（ESD研究会）は、この自由学園の理論と実践から、私たちの研究課題であるESD実践の今後の方向性や可能性について示唆を得たいと考えました。そして自由学園の教員で本研究会メンバーでもおられる高橋和也先生の御厚意により、2010年7月10日（土）、特別企画として、自由学園への訪問学習会が実現したのです。晴れた夏の日の午後、計22名の参加者が自由学園を訪れ、温かい歓迎の中、充実した学びと交流のひと時を満喫することができました。

#### 第1部：昼食とキャンパス見学 — 生活即教育

今回の自由学園訪問は、第1部のキャンパス見学、第2部のワークショップという2部構成で行われました。当日12時20分に自由学園の正門前に集合した私たちはまず武蔵野の自然に囲まれたその静かで広大なキャンパスに強い印象を受けました。高橋先生の迎えを受けた私たちは男子部の校舎にある応接室に案内され、学園長の矢野恭弘先生から心のこもった歓迎の挨拶を頂きました。それから私たちは羽仁吉一先生記念ホールに案内され、男子部の生徒達とともに昼食をご馳走になりました。自由学園では生活体験を重視する立場から、女子部では生徒自身が当番で昼食を用意し、初等部と男子部では父母が交代で食事を作ります。その手作りの食事は酢豚を主菜とした大変おいしいものですが、食卓では先生方も生徒達と席を共にされ、食事中は先生方からの講話や委員会の担当生徒によるアナウンス等もありました。食事の場が同時に「報告」や「お

話」の時間としても活用されているのが印象的でした。

食事の後、私たちは4グループに分かれ、生徒によるキャンパス案内をしてもらいました。男子部、女子部を経て初等部や最高学部に至るまで校舎、体育館、図書館、大芝生、農園などさまざまな教育施設を見せて頂きましたが、このキャンパス見学を通じて、自由学園の求める教育の理念が非常に鮮明に、体験として伝わって来るのを感じました。とくに印象的だったのは、キャンパス内のあらゆる場所で生徒達が自ら作業をし、清掃や管理を行っている姿です。まさに「生活即教育」という創立者羽仁もと子の教育理念が今日に生かされているのを目の当たりにする思いでした。教育とは自然との調和の中で生活の場をしっかりと構築してゆくことだという信念は、持続可能な社会を作るための教育、すなわちESDに他ならないのではないのでしょうか。

#### 第2部：ワークショップ—自由学園から学ぶこと

1時間あまりの学園見学の後、記念ホールにて、自由学園の教員および生徒を交えてのワークショップが行われました。まず男子部の生徒によって自由学園の学校生活や、東天寮での自治生活、登山や植林活動などの学校行事についての紹介がありました。続いて、最高学部の生活環境委員会により、ごみ管理など環境活動について説明があり、さらに「ネパールワークキャンプ」についての報告がなされました。

自由学園の生徒たちによる発表に続いて、永田佳之先生と高橋和也先生からそれぞれ講話を頂いた後、グループワークが行われました。ここでは5つのグループに分かれ、議論のテーマとして、①自由学園を訪問して最も印象に残ったこと、②自由学園の持続可能性とは何か、③持続可能な社会をつくっていく上で自由学園から学ぶこと、という3つの課題が出されました。各グループ内で議論や意見交換をした後、最後の全体会では、各グループからの発表が行われました。「自由学園で最も印象に残ったこと」については、「全人格性を核とした自治と自足」「責任をもって生活する姿勢」「大地と自分がつながっている共生への確信から生れる希望」といった意見が出されました。また「自由学園から学ぶこと」については、「生活に根ざしたスピリチュアリティこそが真の持続可能性を生む」という視点も提出されました。

全体として今回のESD研究会による自由学園訪問は、生活と一体化した教育実践の姿をまさに体験学習させて頂いたという意味で、非常に貴重な学びの機会になりました。90年前に創設され、今日まで一貫して当初の教育実践を継続してきた自由学園は一見、機能性や効率性を追求する今日の風潮に逆行しているように見えるかもしれませんが、実は持続可能な社会を構築するというESDの今日的課題に見事に適合した教育理念であり、未来に向けて斬新で有望な視点を提供するものであると思います。私たちに貴重な学びと体験と対話の機会を、そして忘れがたい感動の一日をプレゼントして下さった自由学園の皆様がこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

# 学会創設20周年記念出版

## 『グローバル時代の国際理解教育—実践と理論をつなぐ—』の刊行

同志社女子大学 藤原 孝章



1990年に学会の第1回研究大会が開かれ1991年に学会が設立された。2010年は節目の20回大会であり。それを記念して本書が出版された。学会では、20周年の記念出版を、昨年の『学校と博物館でつくる国際理解教育—新しい学びをデザインする』（中牧弘允・森茂岳雄・多田孝志編、明石書店）と来年度刊行予定の『現代国際理解教育事典』（明石書店）とあわせて三部作として位置づけている。

いずれも国際理解教育の最前線を示すものであるが、とりわけ、本書は、2003-2005年度の科研究費研究（「グローバル時代に対応した国際理解教育のカリキュラム開発に関する理論的・実践的研究」）をもとにしており、国際理解教育研究の理論的・実践的成果を示している。また、副題にあるように、学校現場の授業実践を理論的に位置づけ、モデル化し、研究のみならず、学校や地域、学校と外部をつなぐ取り組みに大きな示唆を与えるものとなっている。ぜひ一読を勧めたい。

### 『グローバル時代の国際理解教育—実践と理論をつなぐ—』の内容構成

- まえがき（多田孝志）
- 序章 日本国際理解教育学会の回顧と展望（多田孝志）
- 第I部 国際理解教育カリキュラム開発の理論的枠組み
- 第1章 国際理解教育の理論と概念（渡部淳）
- 第2章 カリキュラムの目標・内容・方法
  - 2.1. 国際理解教育の目標と内容構成（大津和子）
  - 2.2. 教師のカリキュラムデザイン力（藤原孝章）
  - 2.3. 子どもの学びからつくるカリキュラム（宇土泰寛）
  - 2.4. 学びの基本技能としての対話力（多田孝志）
  - 2.5. 実践のためのフレームワーク開発（中山京子）
- 第II部 モデル・カリキュラムの開発と実践
- 第3章 多文化社会
  - 3.1. 学習領域「多文化社会」（森茂岳雄）
  - 3.2. 海を渡る日系移民—多文化共生にむけて（中山京子）
  - 3.3. 多みんぞくニッポン—一人の出会いから学ぶ（織田雪江）
  - 3.4. 地域の人とコンサートを開こう—韓国・朝鮮と日本の音楽でつくる音楽活動（磯田三津子）
- 第4章 グローバル社会
  - 4.1. 学習領域「グローバル社会」（藤原孝章）
  - 4.2. グローバル化大論争—3つの立場（石川照子）
  - 4.3. グローバルヒストリーに向けて—環境史の視点を

- 取り入れた授業作り（田尻信壹）
- 4.4. グローバルイシューと英語学習—英語学習における内容中心アプローチ（石森広美）
- 第5章 地球的課題
  - 5.1. 学習領域「地球的課題」（藤原孝章）
  - 5.2. 世界に広がる戦争—直江津捕虜収容所の学習を通して（中川和代）
  - 5.3. 持続可能な未来への希望—ESD教材としての「対地雷」（成田喜一郎）
  - 5.4. 人権の普遍性と地域性—「女性差別？伝統？誰にとって？」（松井克行）
- 第6章 未来への選択
  - 6.1. 学習領域「未来への選択」（多田孝志・藤原孝章）
  - 6.2. 新しい市民社会を創る—「つながる力」を育む（小嶋祐伺郎）
  - 6.3. 未来志向の日韓関係を築く—現在と過去の連続性に気づき、未来を考えようとする学習活動（釜田聡）
  - 6.4. 歴史認識のちがいをこえて—「原爆投下の是非」の扱い方（鹿野敬文）
- 第III部 国際理解教育の多様な試み
- 第7章 連携でつくる国際理解教育
  - 7.1. 国際理解教育における社会連携（森茂岳雄・高橋順一）
  - 7.2. 学校間連携—UNESCO ASPネットワークでの協同実践（伊井直比呂）
  - 7.3. 地域での連携（山西優二）
  - 7.4. 内外のNGOとの連携—スタディツアーの実践（野中春樹）
  - 7.5. 博物館との連携—国立民族学博物館を活用した実践（今田晃一）
  - 7.6. 海外機関との連携—パールハーバーワークショップの実践（中山京子）
- 第8章 これからの国際理解教育
  - 8.1. 世界遺産教育と国際理解教育（田淵五十生）
  - 8.2. ことばと国際理解教育（吉村雅仁）
  - 8.3. シティズンシップと国際理解教育（嶺井明子）
  - 8.4. 持続可能な開発のための教育（ESD）と国際理解教育（永田佳之）
  - 8.5. 外国語活動と国際理解教育（中山博夫・多田孝志）
  - 8.6. 歴史認識と国際理解教育（桐谷正信）
- 終章 国際理解教育の未来に向けて（米田伸次）
- 付録 国際理解教育をさらに学びたい人のために—基本文献案内（森茂岳雄）
- [資料1] 年表：日本国際理解教育学会の研究活動の歩み
- [資料2] 学会誌：『国際理解教育』の主要目次
- コラム 国際理解教育の風
  - 1. アメリカ合衆国編（藤原孝章）
  - 2. イングランド編（藤原孝章）
  - 3. オーストラリア編（宇土泰寛）
  - 4. ロシア編（嶺井明子）
  - 5. 中国編（森茂岳雄）
  - 6. 韓国編（釜田聡）
  - 7. アジア編（永田佳之）
  - 8. アフリカ（ザンビア）編（大津和子）
- あとがき（藤原孝章）
- 索引

# 2010（平成22）年度総会報告

第20回目を迎えた研究大会が聖心女子大学（実行委員長 永田佳之理事）にて7月2日（金）～4日（日）にわたって盛況に開催される中、2010年度の総会が開催された。総会では、大津和子常任理事を新会長とする新体制の人事が承認されるとともに、

2009年度の事業、決算報告ならびに2010年度の事業計画、予算案が承認された。また、学会賞を受賞した横田和子会員への表彰式も執り行われた。

## 2009（平成21）年度 日本国際理解教育学会の事業報告について

### 1. 第19回研究大会開催

日本国際理解教育学会第19回研究大会が、2009年6月12日（金）午後にはプレイベントを含めて、6月13日（土）・14日（日）の両日に、同志社女子大学現代社会学部（現代こども学科）を会場に開催され、280名を超える参加者があった。

### 2. 各委員会・事業報告

#### 1) 研究委員会

研究委員会では、学会が行う特定課題研究をできるだけ多くの会員が参加できるようにするために、2007年度よりプロジェクト方式を採用している。

2007年度開始の「ことばと国際理解教育」（担当理事：山西優二）は、2009年6月14日の第18回研究大会（於同志社女子大学）の特定課題研究において研究成果の報告を行った。その成果をまとめて、『国際理解教育』Vol.16で「特集」となった。

2008年度開始の「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」（担当理事：巖井明子）は、第20回研究大会（於聖心女子大学）の特定課題研究において最終成果報告を行った。

第二期として2009年度より「持続可能な社会形成と教育—ESDの実践基盤に関する総合的研究—」（担当理事：永田佳之）が、新規プロジェクトとして研究をスタートしている。

#### 2) 紀要編集委員会

紀要『国際理解教育』16号の刊行（第20回研究大会での配布）に向けての編集作業がおこなわれた。第15号からは、学会の特定課題研究に対応した特集論文を掲載することとなり第16号では「ことばと国際理解教育」として、3本の研究論文と7本の特集論文とを掲載した。尚、16号から創友社より明石書店に印刷・出版を変更した。横田和子「ことばの豊饒性と国際理解教育—ことばとからだのかかわりを中心に—」を学会賞として決定した。

#### 3) 国際理解教育実践研修会

##### ①古屋研修会

「ESDと学校教育」をテーマに日本国際理解教育学会とESD学校教育研究会の共催（ESD授業デザインプロジェクト公開研究会）の形で2009年10月31日に東海学園大学を会場に研修会が行われた。学会員ほか学生や地域の方の参加も含めて32名の参加があった。

##### ②東京研修会

「21世紀の教育の方向を考える—『関わり・つながり』を視点として—」をテーマに2010年2月27日に目白大学を会場に研修会が行われ、当学会の会員を含め、72名の参加者で開催された。21世紀の教育においては、地域への貢献、および、世界との「関わり・つながり」が重視されるべきことを実感できた研修会であった。

#### 4) 国立民族学博物館との共同事業

民博との共催による第5回博学連携ワークショップが、8月4日、大阪府吹田市の国立民族学博物館にて開催された。第一部では、三つの講演があり、その後、「民博の教員によるミュージアムツアー」を行いリニューアルされたアフリカ、西アジアの展示を中心に館内をまわった。午後には五つのワークショップが実施された。プログラムの最後は、「映像で振り返る講評」でプレイフルな学びの姿にあふれた参加者の感動的な映像で一日のプログラムをふりかえり、大津和子副会長の講評で研修の幕を閉じた。なお、昨年8月にはこれまでの民博における博学連携の成果をまとめて、民博側中牧弘允氏と学会側森茂岳雄・多田孝志両氏の編集による『学校と博物館でつくる国際理解教育—新しい学びをデザインする—』（明石書店）が出版された。

### 3. 韓国国際理解教育学会及びワークショップ参加

2009年11月14日・15日、第10回韓国国際理解教育学会がソウルの梨花女子大学にて開催された。日本からは前回（2008年）の8名を大幅に上回る19名の会員が参加した。大会の前日の午後には、日韓共通国際理解教材開発プロジェクトのメンバーは、ソウルの明洞にあるAsia-Pacific Center of Education for International Understanding (APCEIU) で研究会を開き、研究成果についての討議及び大会での発表の準備を行った。第一日目の14日の午前中に、七つの分科会で自由研究が行われた。日本からの参加者は合計8本の発表を行った。また、シンポジウムでも、中山博夫会員が「日本における多文化教育と『外国語活動』」について報告した。

### 4. 公文国際奨学財団夏期教員研修会派遣

大阪府立三島高等学校の松井克行会員と同志社中学校の織田雪江会員を推薦、派遣した。

### 5. 理事会開催

（理事会） 平成21年6月12日 京都  
平成21年12月12日 東京  
（常任理事会）平成21年4月19日 東京  
平成21年7月26日 東京

### 6. 事務局報告

1) 会報発行 第35号（2009年10月）、第36号（2010年3月）

#### 2) 後援名義

- ・グローバル教育コンクール2009（主催：外務省）
- ・平成21年度国際教育セミナー（主催：財団法人大阪府国際交流財団）
- ・夏期教員ワークショップ（主催：武蔵野市国際交流協会）

#### 3) 会員数（2010年3月末）

477名（正会員名402、学生会員69名、団体会員6）

#### 4) 会費納入状況 70%

## 2009（平成21）年度 日本国際理解教育学会の収支決算 平成21年4月1日から平成22年3月31日まで

### I. 収入の部

| 科目        | 20年度決算額   | 21年度予算額   | 21年度決算額   | 備考                                |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------------------------------|
| 入会金       | 153,000   | 240,000   | ▲135,000  | 3,000×45名                         |
| 年会費       | 2,804,000 | 3,000,000 | 3,159,000 | 過年度482,000/本年度2,613,000/次年度64,000 |
| 助成金       | 1,000,000 | 1,000,000 | 1,000,000 | 公文国際奨学財団より                        |
| 雑収入       | 60,133    | 50,000    | 37,582    | 紀要・報告書販売、利息                       |
| 当期収入合計(A) | 4,017,133 | 4,290,000 | 4,331,582 |                                   |
| 前期繰越収支差額  | 1,493,285 | 2,083,909 | 2,083,909 |                                   |
| 収入合計(B)   | 5,510,418 | 6,373,909 | 6,415,491 |                                   |

### II. 支出の部

| 科目              | 20年度決算額   | 21年度予算額   | 21年度決算額   | 備考                   |
|-----------------|-----------|-----------|-----------|----------------------|
| 1. 事業費          | 3,008,867 | 3,350,000 | 2,757,651 |                      |
| 大会運営補助費         | 400,000   | 400,000   | 400,000   | 22年度大会用              |
| 紀要委員会費          | 184,600   | 200,000   | 85,180    | 16号編集費               |
| 紀要刊行費           | 1,100,000 | 1,100,000 | 1,100,000 | 15号刊行費               |
| 会報刊行費           | 243,100   | 300,000   | 189,895   | Vol. 35, 36刊行費       |
| 理事会費            | 412,520   | 400,000   | 192,710   | 理事会出席旅費              |
| 研究委員会費          | 500,000   | 600,000   | 500,000   |                      |
| 国際理解教育実践研修会費    | 103,567   | 200,000   | 200,000   |                      |
| 国立民族学博物館との共同事業  | 65,080    | 90,000    | 89,866    |                      |
| 国際交流費           | 0         | 30,000    | 0         |                      |
| 学会費             | 0         | 30,000    | 0         |                      |
| 2. 管理費          | 417,642   | 740,000   | 372,100   |                      |
| 事務局経費           | 60,000    | 60,000    | 44,430    | 出版社との打合せ             |
| 人件費             | 47,000    | 100,000   | 26,000    | 紀要・ニュースレター発送アルバイト    |
| 通信費             | 155,400   | 330,000   | 156,300   | 紀要・ニュースレター郵送料        |
| 設備・備品費          | 0         | 10,000    | 0         |                      |
| 消耗品費            | 29,442    | 40,000    | 2,573     | 事務用品                 |
| 会議費             | 14,455    | 30,000    | 12,127    | 理事会会場使用料             |
| 旅費交通費           | 66,010    | 80,000    | ▲124,160  | インフルエンザ対応、事務局アルバイト旅費 |
| 印刷製本費           | 39,375    | 80,000    | 0         |                      |
| 雑費              | 5,960     | 10,000    | 6,510     | 振込手数料                |
| 3. 予備費          | 0         | 200,000   | 110,352   | 理事選挙管理委員会費・事務局引越     |
| 当期支出合計(C)       | 3,426,509 | 4,290,000 | 3,240,103 |                      |
| 当期支出差額(A)-(C)   | 590,624   | 0         | 1,091,479 |                      |
| 次期繰越収支差額(B)-(C) | 2,083,909 | 2,083,909 | 3,175,388 |                      |

2010（平成22）年度 日本国際理解教育学会の事業計画について

1. 全体方針（大津和子会長）

- ① 会員に資する学会運営および学会組織の改善
- ② 21世紀の教育的課題に対応した研究・実践活動の展開
- ③ 海外の関連学会・団体、国内の関連組織との連携の強化
- ④ 学会の財政の安定化に向けて、会員の拡大および会費納入の促進
- ⑤ 会員の研究・実践活動への支援および活動機会の拡大
- ⑥ 研究の機会拡大に向けて、外部資金獲得のための積極的な活動の展開
- ⑦ 20周年記念事業の推進

2. 各委員会等の事業計画

- 1) 研究委員会
  - 特定課題研究プロジェクトの推進
  - ① 「ことばと国際理解教育」（担当理事：山西優二）：学会誌『国際理解教育』Vol.16（2010年7月刊）に「特集」として研究成果を発表
  - ② 「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」（担当理事：嶺井明子）：2010年度研究大会特定課題研究において研究成果を発表
  - ③ 「持続可能な社会形成と教育?ESDの実践的基盤に関する総合的研究?」（担当理事：永田佳之）：公開研究会等を開催し研究を推進
  - ④ 2010年度新規プロジェクトの申請
    - 「『現代国際理解教育事典（仮称）』編纂・刊行プロジェクト」（担当理事：多田孝志）
    - 「『ことばと国際理解教育』に関する実践研究」（担当理事：山西優二・吉村雅仁）
- 2) 紀要編集委員会
  - ① 紀要『国際理解教育』17号の編集と刊行
  - ② 会員からの論文投稿募集
  - ③ 17号では特集「シティズンシップと国際理解教育」を企画
- 3) 実践研究委員会
  - 次の目的により、年間2回、全国各地で研修会を開催する。
  - ① 会員に学会の研究・実践に参加・参画する機会を設ける。② 国際理解教育の実践上の課題について説明していく。③ 全国各地の会員確保・多様な教育組織と連携する機会とする。（含むNGO・NPO）④ 学会本体の実践・研究活動と連携し、充実発展に資する役割をこなす。
  - ・今年度の実践研修会
    - 第1回 島根県国際理解教育研究会との連携（会場：出雲市立伊野小学校、期日：8月6日）
    - 第2回 未定

- 8月6日）
- 第2回 未定
- 4) 20周年記念事業
  - ① 日本国際理解教育学会編『グローバル時代の国際理解教育—実践と理論をつなぐ』（明石書店）の刊行、2010年7月
  - ② 『現代国際理解教育事典（仮称）』の編纂・刊行
  - ③ 20周年記念講演会 佐藤学（東京大学大学院教授）「21世紀の学校における国際理解教育」
- 5) 各事業
  - ① 国立民族学博物館との共同事業
    - 博学連携教員研修ワークショップ2010 in みんなく「学校と博物館でつくる国際理解教育—新しい民博展示を活用する—」（会場：国立民族学博物館、日時：8月5日（木）10:20~17:00）
  - ② 日韓中の協働による相互理解のための国際理解教育カリキュラム・教材の開発
    - 2010年度第1回全体会議 会場 聖心女子大学 7月2日（金）
    - 2010年度第2回全体会議 韓国国際理解教育学会研究大会 11月頃
- 3. 2011年度（平成23年度）第21回研究大会への準備
  - 開催日時：2011年6月18日（土）～19日（日）（予定） 開催会場：京都橋大学 実行委員長：井ノ口貴史（京都橋大学）

2010-12年度 日本国際理解教育学会 役員

- ◆顧問：天城勲 米田伸次
- ◆常任理事：大津和子（会長 北海道教育大学） 藤原孝章（副会長 同志社女子大学） 森茂岳雄（副会長 中央大学） 多田孝志（目白大学） 田淵五十生（奈良教育大学） 山西優二（早稲田大学）
- ◆理事：伊井直比呂（大阪教育大学附属池田高等学校） 今田晃一（文教大学） 宇土泰寛（椋山女子学園大学） 小関一也（常磐大学） 釜田聡（上越教育大学） 桐谷正信（埼玉大学） 田尻信壹（富山大学） 永田佳之（聖心女子大学） 山京子（帝京大学） 中山博夫（目白大学） 成田喜一郎（東京学芸大学） 嶺井明子（筑波大学） 吉村雅仁（奈良教育大学） 渡部淳（日本大学）
- ◆監事：井ノ口貴志（京都橋大学） 森田真樹（立命館大学）
- ◆事務局長：森茂岳雄（中央大学） ◆事務局次長：栗山丈弘（文化女子大学）

2010（平成22）年度 日本国際理解教育学会の予算 平成22年4月1日から平成23年3月31日まで

I. 収入の部

| 科目        | 21年度決算額   | 22年度予算額   | 備考        | 21年度予算額   |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 入会費       | 135,000   | 180,000   | 3,000×60名 | 240,000   |
| 年会費       | 3,159,000 | 3,000,000 |           | 3,000,000 |
| 助成金       | 1,000,000 | 0         |           | 1,000,000 |
| 雑収入       | 37,582    | 50,000    | 紀要販売等     | 50,000    |
| 当期収入合計(A) | 4,331,582 | 3,230,000 |           | 4,290,000 |
| 前年度繰越収支差額 | 2,083,909 | 3,175,388 |           | 2,083,909 |
| 収入合計(B)   | 6,415,491 | 6,405,388 |           | 6,373,909 |

II. 支出の部

| 科目              | 21年度決算額   | 22年度予算額    | 備考             | 21年度予算額   |
|-----------------|-----------|------------|----------------|-----------|
| 1. 事業費          | 2,757,651 | 3,660,000  |                | 3,350,000 |
| 大会運営補助費         | 400,000   | 400,000    | 23年度大会用        | 400,000   |
| 紀要委員会費          | 85,180    | 200,000    | 17号編集費         | 200,000   |
| 紀要刊行費           | 1,100,000 | 500,000    | 16号刊行費         | 1,100,000 |
| 会報刊行費           | 189,895   | 250,000    | Vol. 37, 38刊行費 | 300,000   |
| 理事会費            | 192,710   | 400,000    |                | 400,000   |
| 研究委員会費          | 500,000   | 500,000    |                | 600,000   |
| 国際理解教育実践研究会費    | 200,000   | 150,000    |                | 200,000   |
| 国立民族博物館との共同事業   | 89,866    | 80,000     |                | 90,000    |
| 国際交流費           | 0         | 50,000     |                | 30,000    |
| 学会賞             | 0         | 30,000     |                | 30,000    |
| 20回大会記念事業       | 0         | 1,000,000  | 記念図書刊行費・特別講演費  | 0         |
| 20周年記念事業        | 0         | 100,000    | 国際理解教育辞典編纂     | 0         |
| 2. 管理費          | 372,100   | 540,000    |                | 740,000   |
| 事務局経費           | 44,430    | 60,000     | 学会HP更新費        | 60,000    |
| 人件費             | 26,000    | 100,000    |                | 100,000   |
| 通信費             | 156,300   | 170,000    | 郵送費            | 330,000   |
| 設備・備品費          | 0         | 10,000     |                | 10,000    |
| 消耗品費            | 2,573     | 20,000     | プリンタインク、宛名ラベル等 | 40,000    |
| 会議費             | 12,127    | 30,000     | 会場借料           | 30,000    |
| 旅費交通費           | 124,160   | 80,000     |                | 80,000    |
| 印刷製本費           | 0         | 60,000     | 封筒印刷代          | 80,000    |
| 雑費              | 6,510     | 10,000     | 振込手数料          | 10,000    |
| 3. 予備費          | 110,352   | 60,000     |                | 200,000   |
| 当期支出合計(C)       | 3,240,103 | 4,260,000  |                | 4,290,000 |
| 当期支出差額(A)-(C)   | 1,091,479 | ▲1,030,000 |                | 0         |
| 次期繰越収支差額(B)-(C) | 3,175,388 | 2,145,388  |                | 2,083,909 |

※尚、予算の『現代国際理解教育事典(仮称)』の編纂事業については、総会において事業実態に応じて補正予算を組むことが承認された。

# 理事会（各委員会等）報告

## 研究委員会より

筑波大学 嶺井 明子

研究委員会は2010年7月の聖心女子大学における第20回研究大会・総会において、新体制でスタートしました。第1回の研究委員会を7月3日、第2回を8月30日に開催し、今後3年間の研究委員会の活動方針について意見交換を行い、公募した研究プロジェクトの審査など行いました。以下に、会議の概要を報告いたします。

### 1. 新体制の発足

研究委員会の委員は下記の7名です。どうぞよろしくお願いたします。

嶺井明子（委員長・筑波大学）、宇土泰寛（副委員長・椙山女学園大学）、田尻信壹（富山大学）、永田佳之（聖心女子大学）、藤原孝章（同志社女子大学）、森茂岳雄（中央大学）、渡部淳（日本大学）

### 2. 研究プロジェクト方式を基本的に継承

従来通り、会員から特定課題研究のテーマを公募し、研究委員会で審査し、理事会で承認を得たものを特定課題研究プロジェクトとして採択します。その際、各プロジェクトに理事を最低一人は含めることになっています。採択件数は年度あたり1件とし、少額ですが予算措置をいたします。今年度の予算によりますと、年間10万円、大会発表時は20万円、配分することができます。各プロジェクトは、公開研究会などを積み上げて、最終的に研究大会時に特定課題研究としてその成果を公開し、それを学会紀要『国際理解教育』に特集としてまとめます。その際、研究委員会が原稿の査読を担当します。

### 3. 共通テーマは「共生社会の構築と国際理解教育」

各プロジェクトはそれぞれ別個のテーマで研究を推進しますが、「共生社会の構築と国際理解教育」という共通のテーマのもとで推進していただきます。これは、2007～2009年度の共通テーマを継承するものです。各プロジェクトは研究委員会と連絡をとりながら研究を推進します。

### 4. 現在進行中のプロジェクト

「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」（代表者：嶺井明子）は、第20回研究大会の特定課題研究として2010年7月4日（日）に研究成果の最終報告を行いました。現在、学会大会当日の質疑応答も含め、その成果を学会紀要にまとめる作業に着手しており、次号の『国際理解教育』17号で特集の予定です。

「持続可能な社会形成と教育：ESDの実践基盤に関する総合的研究」（代表者：永田佳之）は、2011年の第21回研究大会における特定課題研究としてその成果を報告します。

なお、新規プロジェクトにつきましては、2010年8月20日締め切りにて追加募集を行いました。4件の申請があり、研究委員会で審査の結果、1件が採択されました（「文化的多様性と国際理解教育」代表者：横田和子）。9月26日の常任理事会において承認されましたので、早速スタートします。詳細は学会ホームページに掲載いたしますので、ご覧ください。

## 紀要編集委員会より

同志社女子大学 藤原 孝章

### 1. 学会誌『国際理解教育』16号がリニューアルして刊行されました。

学会紀要の印刷発行を明石書店にお願いしました。創刊号以来、国際理解教育学会を紀要誌出版の面からご支援、ご協力いただいた創友社の新井次郎社長には本当にお世話になりました。また、紀要誌の英文校閲に携わっていただいた岡田真樹子先生（在職時：国際基督教大学高等学校帰国生徒教育センター長）も、ご退職とともに前号をもって最後となりました。お二方には、この場をかりてあらためてお礼を申し上げます。

さて、16号からは、市販もかねた出版になりますので、誌面

が一回り大きめのサイズ（B版）となり、本文も二段組みとなるなど大幅にリニューアルしました。明石書店の編集担当の森富士夫さんには、原稿入稿後も三校にわたって丁寧な編集作業をしていただきました。感謝申し上げます。

### 2. 『国際理解教育』17号の発行スケジュールは、次の通りです。

論文応募の締め切りは7月31日で、原稿の締め切りは、2か月後の9月30日です。その後の査読をへて、掲載論文が決定されます。最終原稿の提出期限は3月4日です。応募論文に関しては、前号に引き続き、研究と実践研究を同列に扱います。丁寧な査読をおこない、リライトの仕方などについてもアドバイスいたします。

誌面としては、査読論文の他に、「特集論文」のページ（「シティズンシップと国際理解教育」）、第20回研究大会記念講演の佐藤学先生の論文や諸報告、書評・新刊紹介などが掲載されます。（注：書評・新刊ともご希望の場合は編集委員会に著書を寄贈してください。委員会で判断の上、依頼させていただきます。新刊紹介については執筆者紹介としています。）

### 3. 学会賞

「日本国際理解教育学会研究奨励賞」（学会賞）として、横田和子論文「ことばの豊穡性と国際理解教育—ことばとからだのかかわりを中心に—」（『国際理解教育』14号、46-63ページ掲載）が採択され、横田和子氏には表彰状とともに記念品が研究大会総会において授与されました。次回の学会賞は、学会誌17-19号（2011-2013年）の3年間の学会誌論文を対象に選定されます。

## 理事会報告

事務局

2010年度の第1回理事会が、3月27日に中央大学駿河台記念館で開かれ、新理事15名および新旧事務局2名の計17名が出席した。

第1回理事会では、2010年-12年度の新体制が発足し、大津和子新会長からは「社会の変化に対応しつつ、国際理解教育の概念を拡大すること。学会員のニーズに応えながら、会員の積極的参加を推進する事業を展開すること。また新たな会員の獲得をめざし財政の安定化を図ること、を基本方針したい」との抱負が述べられた。尚、新体制の発足にともない、事務局が日白大学から文化女子大学に移転することとなった。この他、学会創設20周年を迎え、記念図書となる『グローバル時代の国際理解教育—理論と実践をつなぐ—』（明石書店）の刊行や、『現代国際理解教育事典（仮称）』の編纂事業がスタートする一方で、公文国際奨学財団からの助成金が競争的資金に移行することともなう財政的環境変化にどう対応していくかが議論された。新規会員の積極的な獲得や外部資金の獲得など、財政基盤の安定化に向けた取り組みの必要性が指摘された。

第2回の理事会は、7月2日に聖心女子大学にて開催され、理事19名、事務局1名、次期研究大会実行委員長の井ノ口監事を含め21名が出席した。会長を退任される多田孝志会長からは「3年間の皆様のご尽力に感謝申し上げます。大津新会長のもと発展することを願い、一理事として貢献したい」とご挨拶されるとともに逝去された川端末人元副会長への哀悼の意が表された。

議案では、第二期を迎えている研究プロジェクトについての議論が集中的になされた。第一期に採択された研究プロジェクトの継続申請をどう扱うべきか。積極的に新規の研究プロジェクトを募っていくためにはどうすべきかなどの意見交換がなされた。結論を今後の研究委員会で議論に持ち越されたが、新規研究プロジェクトを追加で公募することが確認された。

また、永田理事よりESDをテーマとした海外スタディツアーを学会として実施したいとの提案がなされ、理事会として承認された。今後、計画を立案していく予定である。



## お知らせ（これからの行事・イベント案内）

### 第11回韓国国際理解教育学会のご案内

第11回を迎えた韓国国際理解教育学会の研究大会が下記の予定で開催されます。例年、日本から10名以上の参加者があり、研究発表やシンポジウムでは、熱い討議が繰り広げられています。また、日韓の友情を深める場にもなっています。なお、ご参加を希望の方は下記のとおりお申込みください。

- 日 程：2010年11月13日(土)・14日(日) テーマ「開発協力と国際理解教育」  
13日(土) 午前:自由研究発表 午後:国際シンポジウム「国際開発と国際理解教育」  
14日(日) 未定
- 会 場：ソウル大学
- 主 催：韓国国際理解教育学会
- 申し込み先・問い合わせ  
韓国国際理解教育学会担当 釜田聡（上越教育大学） TEL/FAX：025-525-6927
- 申し込み方法  
担当：kamada@juen.ac.jp 事務局：kokusairikai@bunka.ac.jp の両方にE-mailでお申込みください
- 参加申し込み締め切り：10月20日

※経費及び渡航手続き：渡航、宿舎に関しては原則として各自手配をお願いします。大会参加費は韓国学会の負担の予定ですが、その他は自己負担です。韓国の学会から詳細な情報が届き次第、参加希望者には随時お知らせいたします。

### 2010年度第2回 実践研修会のご案内 「世界遺産学習全国サミット2010 in なら」との共催

「ESDとしての世界遺産教育」

- 日 時：2010年11月28日(日) 10時～17時15分 ●会 場：奈良教育大学
- 主 催：文部科学省 日本ユネスコ国内委員会 奈良市教育委員会、奈良教育大学、奈良国立博物館、世界遺産学習連絡協議会 日本国際理解教育学会
- 内 容
  - ・基調講演「奈良らしい教育の中核：世界遺産学習」奈良市教育長 中室雄俊
  - ・シンポジウム「持続発展教育としての世界遺産学習」
  - ・分科会報告（幼・小・中・高・大学）
  - ・世界遺産学習会
    - I 「平城京遷都の真実に迫る」 奈良文化財研究所副所長 井上和人氏
    - II 奈良市立月ヶ瀬小学校（月ヶ瀬狂言）、奈良市立大安寺西小学校（雅楽）
  - ・世界遺産学習講演会「子どもに伝えたい奈良」 奈良国立博物館学芸部長 西山厚氏
- 申込み・問い合わせ  
奈良市教育委員会学校教育課 西口美佐子（0742-34-4763 sekaiisan@naracity.ed.jp）

### 研究大会のお知らせ

- ◆2011年度（平成23年度）第21回研究大会
- 開催日時：2011年6月18日(土)～19日(日) ●開催会場：京都橘大学
- 実行委員長：井ノ口貴史（京都橘大学）
- ◆学会ホームページのご案内  
研究大会やワークショップなどの情報をご覧いただけます。アドレスは次のとおりです。  
<http://www.kokusairikai.com/>

- ◆年会費納入のお願い  
当学会の活動は会員の皆様の会費でまかなわれております。今年度までの年会費未納の会員は至急会費をお支払いください。どうぞよろしくお願いいたします。
- 会 費：正会員 8,000円 学生会員 4,000円 団体会員 30,000円
- 郵便振り込み：口座番号 00120-5-601555 加入者名 日本国際理解教育学会

- ◆紀要『国際理解教育』の購入手続きについて  
現在、第1号を除き、最新の16号までの在庫がございますが、在庫が僅少の号も出始めております。学会ホームページにバックナンバーの総目次が掲載されています。
- ご希望の号数および冊数をファックス（042-327-8874）またはEメール（kokusairikai@bunka.ac.jp）で事務局までお知らせください。振り込み用紙をお送りいたします。なお、会員の皆様には、会員価格でお求めいただけます。

# 事務局通信

## 新入会員

以下の15名、1団体が平成22年8月31日までに承認されました。

| 氏名     | 所属                   | 氏名              | 所属             |
|--------|----------------------|-----------------|----------------|
| 吉田 誠   | 奈良教育大学               | 山根 俊彦           | 神奈川県立横浜清陵総合高校  |
| 岡本 能里子 | 東京国際大学               | 鈴木 隆弘           | 清和大学           |
| 廣川 由美  | 大分東高等学校              | 原 郁雄            | 長野県駒ヶ根市立赤穂東小学校 |
| 河内 嵩史  | 上越教育大学大学院            | 早川 佳乙里          | 上智大学大学院        |
| 遠藤 悠子  | 相模原市立宮上小学校           | 田上 達人           | 長野県安曇野市立穂高北小学校 |
| 下島 泰子  | 千葉大学・国際教育センター        | 的野 記子           | 兵庫県立農業高校       |
| 福田 浩子  | 茨城大学                 | 横山 聡洋           | 京都文教短期大学附属小学校  |
| 樋上 昌子  | Mary Baldwin College | 特定非営利活動法人 豊かな大地 | 団体会員           |

## 寄贈図書

- 小林由利子、高山 昇、吉田真理子、山本直樹、中島裕昭 著『ドラマ教育入門—創造的なグループ活動を通して「生きる力」を育む教育方法』図書文化、2010年
- 小林茂子 著『「国民国家」日本と移民の軌跡—沖繩・フィリピン移民教育史』学文社、2010年
- 小林由利子 編 アレン・オーエンズ、ナオミ・グリーン 著『やってみよう！アプライドドラマ 自己理解を深めるドラマ教育のすすめ』図書文化社、2010年
- 馬淵 仁 著『クリティーク 多文化、異文化—文化の捉え方を超克する』東信堂、2010年

## 事務局からの連絡とお願い

### ◆会員の図書・文献寄贈のお願い

会員の皆様の関わられました文献・図書・報告書・教材など、また、会員の所属する学校での紀要等がございましたら、学会にご寄贈ください。

### ◆住所・所属等変更連絡のご協力をお願いします

事務局からの郵送物が「転居先不明」で返送され、また、会員のみなさまへのご連絡が滞ってしまっている場合が少なからずあります。所属変更によるお引っ越しなどで住所・所属等に変更がありましたら、ファックス（042-327-8874）または、Eメール（kokusairikai@bunka.ac.jp）でお知らせください。また、会員種の変更もお知らせください。

### ◆ニューズレター投稿のお願い

ニューズレターでは、ひろく会員の皆様の活動をご紹介するために「会員だより」の欄を設けています。「会員だより」では、以下の条件で、会員の投稿をお願いしています。

- 内 容：現在の研究テーマや活動、国際理解教育に関する考えについて
- 分 量：本文800字以内、写真（JPEG形式、デジカメ写真）1枚

投稿をご希望する場合は、お名前、所属を明記の上、事前に以下の連絡先までメールでお知らせください。あらためて執筆のご依頼をさせていただきます。投稿希望者が多数の場合には、調整させていただきます。

- 連絡先：桐谷 正信（埼玉大学） kiritani@mail.saitama-u.ac.jp